厚生労働科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）
児童虐待等の子どもの被害、及び子どもの問題行動の予防・介入・ケアに関する研究
（主任研究者　奥山眞紀子）

分担研究報告書

分担研究者　富田　拓　国立武蔵野学院

児童自立支援施設におけるアセスメントとケア

研究要旨

本研究の最終年度に当たる今年度は、昨年までに作成した「生活ものさし」第 3 版を用いて、その信頼性・妥当性の検討を行った。

1，信頼性の検討

1）一人の児童を、2 人の職員が「生活ものさし」を用いて独立して評価することにより、その評価の一致率を見た。「現在の評価」での完全一致率は平均 68.7%、「半年前との比較」での完全一致率は平均 56.2%であった。

2）クロンバックのα係数を全体、及び構成概念ごとに算出した。「現在の評価」でのα係数は 0.984、「半年前との比較」でのα係数は 0.994 であった。

2，内容的妥当性：平成 17，18 年度における作成過程で担保されているものと考えた。

3，基準関連妥当性の検討：これまで、「生活そのものを計る」という指標が存在していなかったため、ここでは、経験を積んだ職員によって児童の生活の評価を 100 点満点で行ったものと、他の職員が「生活ものさし」を用いた評価との相関の検討を行った。「現在の評価」での相関は -0.66、「半年前との比較」での相関は-0.45 であった（評価の得点の方向が互いに逆のため符号がマイナスとなっている）。

以上から、「生活ものさし」が充分な信頼性・妥当性を有していることが確かめられた。
今後、児童自立支援施設を中心に実際に使用しながら、さらなる洗練を目指すことで、生活型の施設において、児童の生活そのものを捉えることができるツールとして、活用できるものと思われる。さらには、生活モデルの有効性の検証を目指したい。

研究協力者

相澤仁、奥山隆、家近二郎、小柳紘介 1)、捧一 2)、高橋一正 3)、岩井幸祐４）、永川亮 5)、岩本健一 6)、浅野恭子 7)、西浪祥子 8)、多田薫 9)、宇佐見兼市 10)

1)国立武蔵野学院　2)社会福祉法人北海道家庭学校　3)北海道立大沼学園
4)栃木県県北児童相談所　5)東京都立萩山実務学校　6)滋賀県立淡海学園
7)大阪府立修徳学院　8)岡山県立成徳学校
9)福岡県立筑後いずみ園
10)国立きぬ川学院

A．研究目的

児童自立支援施設は、「不良行為をなし、またはなすおそれのある児童及び家庭環境その他の環境上の理由により生活指導等を要する児童」を対象とする児童福祉施設である。いわゆる環境療法を主体とした「生活モデル」をとっており、疾病や症状のようなターゲットが存在して、それに対しての治療あるいは処遇を行うと言った「治療モデル」あるいは「心理モデル」ではない。にもかかわらず、これまで、処遇による児童の生活そのものの変化をとらえるための統一的な指標はほとんど存在していなかった。もちろん、心理テスト等を用いて児童の変化を見ることは従来も行われてきた。しかし、児童自立支援施設の処遇の直接のターゲットが生活であり、生活の改善を介して、児童の行動や心理の改善を図ろうとしていることを考えると、処遇による生活の変化を的確にとらえた上で、それが心理や行動の変化にどう結びついていくかを把握すべきであろう。

また、児童自立支援施設は、ほぼ1世紀に及ぶ歴史を有するが、その処遇上の経験知の集積や共有は必ずしも十分ではない。そこで、本研究では、児童自立支援施設における児童のアセスメントの意味、そのあり方について検討を行った上で、全国の児童自立支援施設で使用することのできるアセスメントツールを、児童自立支援施設の直接処遇職員の経験を集約する形で開発することにより、これまで存在していなかった、児童の処遇による生活の変化を捉えるための共通の指標を得ることを目的とする。また、この研究自体によって、全国の児童自立支援施設の連携がなされることをめざすものである。

B．研究方法

本研究は3カ年で行われたが、まず、初年度である平成17年度には、前項の児童自立支援施設職員13名からなる委員会を立ち上げ、職員が児童の生活のどのような点に目を配っているのか、何をもって彼らの成長と捉えているのか、という点に着目して、ブレーンストーミングで項目出しを行った。その結果304項目が出され、その意味内容を検討の上、218項目からなる生活評価票第1版を作成した。また、ＫＪ法により、その概念構成を行った。次に、平成18年度には、17年度に作成した生活評価票第 1 版および項目評価用紙を全国の５８の児童自立支援施設に配布し、その直接処遇職員各１０名ずつの回答を求めた。実際に児童評価票を用いて、各職員に付き１名の児童の評価を行ってもらい、そのデータを集積するとともに、その経験に基づいて、評価票の各項目の妥当性について、５段階で評価し、項目評価用紙に記入することを求めた。この２種類のデータを集計し、１）項目評価用紙による項目の５段階評価について、その分布を検討とする共に、各項目の得点の平均値を算出した。得点の上位のものから順に項目を選び、そこから内容的に重複するものを除外して、評価票第２版暫定版を作成した。２）評価項目の選定とその概念構成の参考とするため、評価票第２版の項目に従って評価票のデータを集計し、因子分析を試行した。因子抽出法は最尤法を用い、プロマックス回転を行った。

全国の児童自立支援施設 58 施設 580 名のうち、53 施設 480 名より回答を得た。回収率は施設数ベースで 91.4%、回答者人数ベースで 82.8%であった。

1)項目評価用紙における計218の質問項目に対する評価を集計し、この評価点の平均値により、項目数を勘案してカットオフポイントを3.90とし、平均点上位８９項目を選び出した。その上で、回答者からのコメントも参考とし、意味的に重複があると思われる項目を、それぞれの評価点および標

準偏差を基準にして除外し、最終的に88項目からなる評価票第3版を作成した。
また、因子分析の結果と、17 年度に行ったＫＪ法による概念構成は、おおむね一致するといってよいと思われた。また、生活そのものを測ることを目的とする指標として、「生活ものさし」というネーミングを行った。

これらの結果を受けて、最終年度である本年は、「生活ものさし第3.3版（資料1）」の信頼性及び妥当性の検討を行った。

1，信頼性の検討

1）一人の児童を、2人の職員が「生活ものさし」を用いて独立して評価することにより、その評価の一致率を見た。ここでは、各項目の評価が完全に一致しているもののみを「一致」とみなした。評価対象は全国の児童自立支援施設入所児童96名とし、それぞれを2人の職員が評価した。

2）クロンバックのα係数を全体、及び構成概念（上記ＫＪ法によるもの）ごとに算出した。対象は全国の児童自立支援施設入所児童 222名である。

2，内容的妥当性

これについては、平成17，18年度の作成過程における手続きで担保されているものと考えた。

3，基準関連妥当性の検討

これまで、「生活そのものを測る」という指標が存在していなかったため、ここでは、経験を積んだ職員 5 名によって児童の生活の評価を100点満点で行ったものと、他の職員が「生活ものさし」を用いて行った評価との相関の検討を行うこととした。対象は、国立武蔵野学院入所児童のうち、直近の入所児童を除く41名とした。これらの児童全員を処遇する機会があり、かつ豊富な経験を有する職員5名が、一人一人の児童について、その生活ぶりを100点満点で採点したものと、その児童の担当寮長・寮母が「生活ものさし3.3版」で評価したものとの相関を見た。以上の統計処理は Microsoft Excel2003を用いた。

＜倫理的配慮＞

おのおののデータについては、全て児童本人を特定できない形で収集を行った。

C．研究結果

1，信頼性の検討

1)96名の児童に対する2人の職員による「現在の評価（3段階：できる、問題あり、できない）」の完全一致率は平均 68.7%（範囲：47.9%-90.4%）であった。「半年前との比較（4段階：改善、やや改善、不変、悪化）」の完全一致率は平均 56.2%（範囲：39.3%-70.2%）であった。

2)222 例を用いてクロンバックのα係数を算出した結果は表1の通りであった。「現在の評価」全項目でのα係数は0.984、「半年前との比較」全項目でのα係数は 0.994であった。

2，内容的妥当性

上述の通り、これについては、平成 17，18年度の作成過程における手続きで担保されているものと考えた。

3，基準関連妥当性の検討

経験を有する職員 5 名による、41 名の児童の生活ぶりの 100 点満点での評価と寮担当職員による「生活ものさし3.3版」での評価の相関は、「現在の評価」で-0.66($p<0.01$)、「半年前との比較」で-0.45($p<0.01$)であった（評価の得点の方向が互いに逆のため符号がマイナスとなっている)。その分布図を図1に示す。

D．考察

信頼性の検討による 2 名の職員の評価の一致率、クロンバックのα係数の値、基準関連妥当性の検討における評価の相関係数の値は、いずれも充分満足できる値であった。

E．結論

「生活ものさし」は児童自立支援施設に在籍する児童の生活そのものを捉えることのできる指標として、充分な信頼性、妥当性を持つことが示された。今後、児童自立支援施設だけでなく、生活型施設における子どもの生活そのものをアセスメントする指標として活用することができるものと思われた。今後、この指標を用いることにより、生活の改善と他の指標の変化との関連の検討を行っていきたい。さらには、生活モデルの検証、つまり生活が改善することによって非行の予後が改善されうるのか、改善されうるとすればそれはどのようなタイプの非行やどのようなタイプの児童に対してなのか、についての検証が期待される。

F．研究業績

論文

富田　拓：少年院と児童自立支援施設の相違とそこから学ぶべきこと　刑政　7月号　第118巻通巻1381号　p.73-76　矯正協会 2007.

富田　拓：児童自立支援施設　非行―彷徨する若者、生の再構築に向けて　上里一郎監修 影山任佐編　p.261-272　ゆまに書房　2007.

富田　拓：発達障害などの精神障害がある非行児童の予後がよいのはなぜか　非行問題 p.104-116　全国児童自立支援施設協議会 2007.

富田　拓：児童自立支援施設を知っていますか　クレリイエール　2月号　クレリイエール編集部 2008.

講演

富田　拓：「矯正教育の現場から発達障害を考える」札幌市発達障害者支援体制整備事業社会適応部会「発達障害と社会不適応」講演会，札幌，11月26日，2007.

富田　拓：「非行臨床の今日的課題―自立支援と矯正教育の協働―」東北北海道児童自立支援施設研修会，11月15日，2007.

富田　拓：「入所ケアにおける被虐待児の育ちの支援体制―攻撃性の問題を中心に―」日本子ども虐待防止学会，12月15日，2007.

資料１

生活ものさし（第３．３版）

実施　　年　　月　　日

児童氏名　　（　　歳）（男・女）　　評価者氏名

・現在、できるかできないかをチェックしてください。

・半年前（入所後6ヶ月未満の場合は入所時）と比べてチェックしてください。

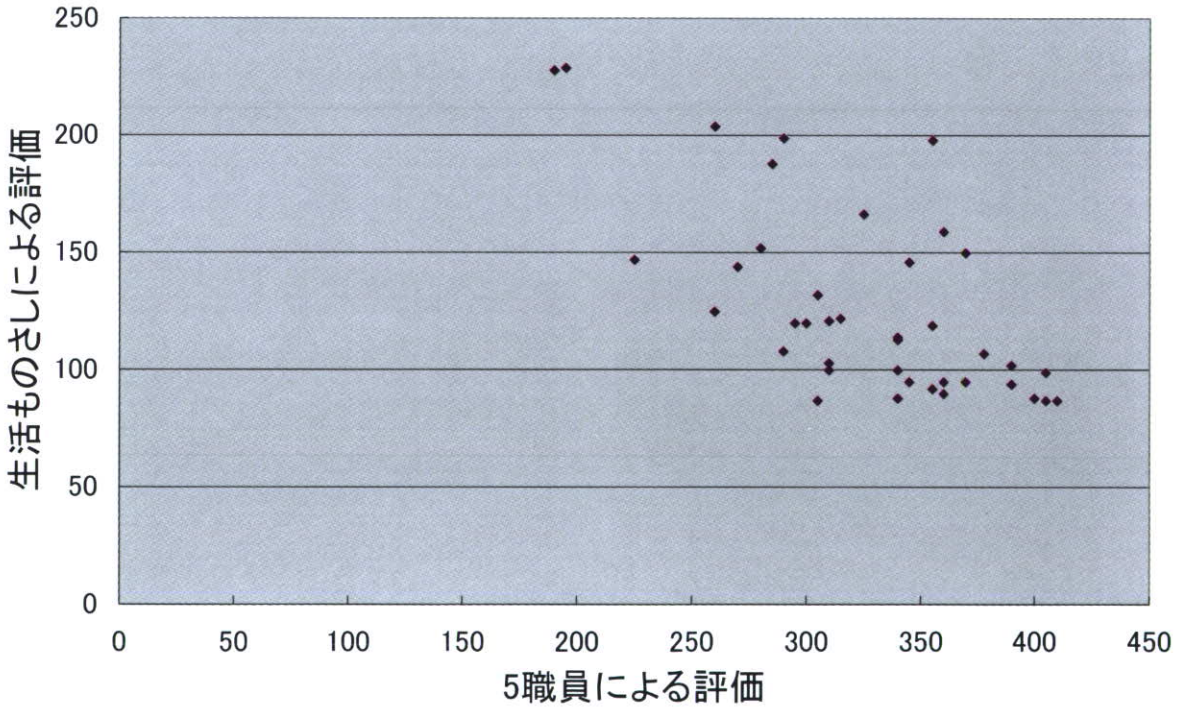
		できる	問題あり	できない		改善	やや改善	不変	悪化
1	少しの失敗でなげやりにならない								
2	挨拶ができる								
3	ごめんなさいが言える								
4	ありがとうが言える								
5	人の話に強引に割り込まない								
6	仕事を頼まれた時、「自分がですか？」「なぜですか（何故自分に）？」と言わない								
7	日記などの文字をていねいに書く								
8	職員によって態度を変えない								
9	職員との会話が楽しめる								
10	他の子のいい所に気付くことができる								
11	勉強に興味を持つ								
12	作業の成果を喜ぶ								
13	親との関係を現実的に話せる								
14	退所後への不安を示す								
15	決まった時間に起きることができる								
16	面会者が快く面会できる								
17	親、面会者が「子どもらしくなった」「表情が変わった」と言う								
18	作業のときおしゃべりをしない								
19	作業に行くことをいやがらない								
20	時間を守る								
21	悪い誘いを断る								
22	他児童に意味のある（有効な）注意や指示をする								
23	順番を守る								
24	自分のことばかり主張しない								
25	自分の非を認める								
26	言い逃れをしない								
27	責任転嫁しない								
28	問題を起こしたとき、時間がかかっても自分から打ち明ける								
29	挑発に乗らない								
30	感情の興奮を自分で鎮めることができる（回復できる）								
31	気持ちが不安定になっても日課をこなせる、あるいは早く日課に戻れる								
32	注意、指導をとりあえずでもきける								
33	人の話をきける								
34	怒られている時に真剣になる								
35	「自分ばっかり」という意識がなくなる								
36	「不公平だ」と騒がない								
37	児童が職員の目をあまり気にしない								
38	職員が目を離すことができる								
39	なにができた、やれた、嬉しかったという話をすることができる								
40	困ったことや悩みなどを相談できる								

41	キレない								
42	ふて腐れたり、いじけたりしない								
43	クラブや作業に行くのを楽しむ								
44	自分が楽しんでできることを見つける								
45	何かに熱中する								
46	自分のことを客観的に語れる								
47	自分の将来・進路を現実的に考えることができる								
48	自分の境遇を受け入れる								
49	生活のリズムに慣れた								
50	ほめられたときに素直に喜べる								
51	見ていなくても働く								
52	作業への集中力、継続力が向上する								
53	帰省前後に不安定にならない								
54	ルールを守れる								
55	すぐに実現できなくても待つことができる								
56	譲ることができる								
57	嘘をつかない								
58	自分の行動をコントロールする								
59	相手にわかってもらおうと努力する								
60	日記の内容が形式的なものから自分の内面的、心理的なことについて書くようになる								
61	自分の思っていることを自分の言葉で表せる								
62	自分と違う考え方を認められる								
63	物事を自分の身におきかえて考えることができる								
64	相手の感情に気づく								
65	まわりの空気を察知して、気を遣うことができる								
66	生徒間の人間関係をうまくこなす								
67	睡眠、食事、排泄が安定する								
68	笑顔が見られる								
69	粘り強く物事に取り組める								
70	仕事がきっちりできる								
71	自分で目標をたてて努力する								
72	前向きさが出てくる								
73	率先して動ける								
74	新しい課題や難しい課題に敢えて挑戦する								
75	人に頼ったり依存しながらも問題を解決することができる								
76	一生懸命やる								
77	自分の課題を意識して行動をセーブできる(例:一言多い子が一言控える努力をする)								
78	相手の目を見て話ができる								
79	叱られたことがわかり、受け入れることができる								
80	他の児童とのトラブルを話し合いで解決できる								
81	けんか、トラブルなどの問題行動が減る								
82	他の児童に「あの子は変わった」と言われる								
83	みんなで何かやる時、いっしょになって楽しめる								
84	入所したことや指導に対して不平不満を言わない								
85	装いやかまえがなくなり素直になる								
86	表情、物腰、物言いが穏やかになる								
87	言われたらサッと動く								
88	段取りを考えて行動する								

表1：クロンバックのα係数

KJ法による分類	項目数	現在	半年前との比較
A:耐える力の成長	19	0.957	0.982
B：コミュニケーションの成長	16	0.927	0.973
C:対人関係の成長	17	0.933	0.975
D:自己評価の成長	14	0.879	0.964
E：生活の成長	22	0.936	0.969
全体	88	0.984	0.994

図1：基準関連妥当性の評価：2つの評価点の分布



平成19年度業績一覧

奥山眞紀子

A　誌上発表

１、学術論文

奥山眞紀子：学校での子ども虐待防止。　精神科臨床サービス７(1)：97-100、2007

奥山眞紀子：子どもを代理とするミュンヒハウゼン症候群。　小児内科 39 (5)：701-704、2007

奥山眞紀子：意図的な傷害行為への取り組み。小児内科 39(7)：1031-1034、2007

奥山眞紀子：性虐待のもたらすものと治療的介入。　精神療法 33(2)：150-156、2007

奥山眞紀子：若年者の性の問題－性的被害を中心に－。　精神科治療学 22(1)：1257-1263、2007

奥山眞紀子：乳幼児揺さぶられ症候群。　小児科臨床 60(4)：611-616、2007

奥山眞紀子：精神保健疾患（虐待など）の世代間伝達。　小児科 48(5)：522-526、2007

奥山眞紀子：アタッチメント－トラウマ問題。　里親と子ども　２：33-39、2007

藤原武男、奥山眞紀子、松本務、有瀧健太郎、余谷暢之、宮坂実木子、仁科幸子：2歳未満児の虐待による頭部外傷の診断基準の提案。　日本小児科学会雑誌（in press）

２、著書

奥山眞紀子：PTSD の診断と治療の選択は？　五十嵐隆、石井正浩、滝田順子、平岩幹男、水口雅、横田俊平、横谷進、渡辺とよ子　編集　「EBM 小児疾患の治療 2007-2008」　pp578-583、中外医学社；東京、2007.2.1

奥山眞紀子：性的虐待へのケアと治療。　浅井春夫　編著　「子どもと性」pp248-257　広田照幸監修　リーディングス　日本の教育と社会⑦　日本図書センター；東京、2007.6.25

奥山眞紀子：こどものうつとは？　奥山眞紀子、氏家武、原田謙、山崎透　編著　「子どものうつハンドブック－適切に見立て、援助していくために」pp21-38、診断と治療者；東京、2007.4.10

奥山眞紀子:虐待について教えてください。　五十嵐隆　編集　「小児ケア Q&A」pp180-181、総合医学社；東京、2007.5.24

奥山眞紀子：子どもの心理社会的状況の把握。コラム MSBP。コラム子どもの死の概念。　奥山眞紀子　編集　「病気を抱えた子どもと家族の心のケア」pp14-19、80-81、164、　日本小児医事出版社；東京、2007.11.6

奥山眞紀子：被虐待児。　行岡哲男、太田祥一　編集　山本保博　監修「救急医療の基本と実際　精神・中毒・災害」　pp103-108、荘道社；東京、2007.12.25

奥山眞紀子：外傷後ストレス障害，東京医学社．２００６；３８：９９-１０１

口演

1.　学会発表

Okuyama M & Fujiwara T "Current Efforts of Child Abuse Prevention in Japan" (oral presentation) 21th Annual San Diego International Conference on Child and Family Maltreatment, San Diego, CA, USA, January 23 (22-26), 2007

奥山眞紀子 「"子どもと共に生きる社会"の視点からの提言」(シンポジスト) 第 1 回日本小児医療政策研究会 東京(ホテル ヴィラフォンテーヌ汐留) 2007.2.17

奥山眞紀子 「トラウマ研究はどこにむかっているか」(オープニングディスカッション) 第6回トラウマティック・ストレス学会 東京(武蔵野大学) 2007.3.9 (9-10)

都丸文子、奥山眞紀子「性的被害を受けた女児の加害児との和解のプロセスの一経験」(一般シンポジウム) 第6回トラウマティック・ストレス学会 東京(武蔵野大学) 2007.3.10 (9-10)

奥山眞紀子 「子どもを虐待から守る社会をめざして」第26回日本社会精神医学会ランチョンセミナー 横浜市(横浜市開港記念館) 2007.3.23 (22 - 23)

奥山眞紀子、藤原武男、松本務、有瀧健太郎、余谷暢之「医療機関における子ども虐待(SCAN)チームの有用性の検討」(一般口演) 第110回日本小児科学会学術集会 京都(京都国際会館) 2007.4.21 (20-22)

奥山眞紀子 「愛着とこころの発達」(パネルディスカッション「動く「こころ」を読む - 医学の原点、こころを探す旅 - 第27回日本医学会総会 大阪(大阪国際会議場・リーガロイヤルホテル・ホテルニューオータニ大阪) 2007.4.8 (6-8)

奥山眞紀子 「医療現場から」共同研究「児童虐待防止に向けて」パネリスト 日本被害者学会第18回学術大会 草加市(獨協大学天野貞祐記念館) 2007.6.9

長田由貴子、奥山眞紀子、泉真由子「母親のＤＶ体験と子どもの精神保健～母子生活支援施設での調査から～」(一般口演) 第97回日本小児精神神経学会 東京(青山学院大学青山キャンパス) 2007. 7.1 (6.30-7.1)

奥山眞紀子 「子どもの心の診療体制の構築について～発達障害/ADHD を中心に」ランチョンセミナー 第４９回日本小児神経学会総会 大阪(グランキューブ大阪 大阪国際会議場) 2007.7.6 (5-7)

Okuyama, M、Fujiwara T, Matsumoto, T et al. "Proposed Diagnosis Criteria for Inflicted Head Injury of Children Younger than Two Years of Age" (Oral Presentation) ISPCAN (International Society for Prevention of Child Abuse and Neglect) Ⅶ Asian Regional Conference September 25 (23-26) , 2007 Manila, Philippine

Okuyama M "Adolescent Medicine in Japan" (invited lecture) the 57th Korean Pediatric Society Annual Congress October 19 (19-20) , 2007 Seoul, Korea

Okuyama M, Izumi M, Fujiwara T & Osada Y " The Impact of DV and the Mothers' Maltreated experience of Children" (New Research Poster Session) AACAP (American Academy of Child and Adolescent Psychiatry) 54th Annual Meeting October 25 (23-28) , 2007, Boston, MA, USA

奥山眞紀子　「子どもの司法面接」（パネラー）　第 48 回児童青年精神医学総会　岩手県盛岡市　2007.11.1（10.30-11.1）

奥山眞紀子 「子ども虐待の発見と防止」（講演）第 4 回京都小児救急疾患研究会講師　京都（ウェスティン都ホテル京都）　2007.11.10

奥山眞紀子 「思春期の子どものこころ」（講演）　第 32 回東日本小児科学会　東京（東京大学安田講堂）　2007.11.23

奥山眞紀子、藤原武男、長田由貴子、松本務、有瀧健太郎、余谷暢之、野坂俊介、宮坂美木子、仁科幸子　「虐待による頭部外傷」（一般口演）　日本子ども虐待防止学会 第 13 回学術集会みえ大会　三重県総合文化センター・アストプラザ・ホテルグリーンパーク津 2007.12.15（14-15）

実方由佳、奥山眞紀子、笠原麻里「Munchausen Syndrome By Proxy の症例における〔接近困難性〕に対する一考察」（一般口演）　日本子ども虐待防止学会 第 13 回学術集会みえ大会　三重県総合文化センター・アストプラザ・ホテルグリーンパーク津　2007.12.15（14-15）

奥山眞紀子　「ＤＶ被害後の母子関係再構築への支援」（シンポジウム）　日本子ども虐待防止学会 第 13 回学術集会みえ大会　三重県総合文化センター・アストプラザ・ホテルグリーンパーク津　2007.12.15（14-15）

２．　一般講演

奥山眞紀子 「虐待について」平成 18 年度広島県児童思春期精神保健事例検討ワークショップ 講師　広島県立生涯学習センター　2007.1.13

奥山眞紀子 「子ども虐待の臨床―医学的診断と対応」　平成 18 年度児童虐待防止研修会　埼玉県医師会　埼玉県県民健康センター　2007.1.18

奥山眞紀子 「子ども虐待の臨床―医学的診断と対応」　平成 18 年度児童虐待防止研修会　埼玉県医師会　埼玉県県民健康センター　2007.2.4

奥山眞紀子 「学校での性被害」　NPO 法人千葉こどもサポートネット第 5 回勉強会　市川市生涯学習センター　2007.2.24

奥山眞紀子 「配偶者からの暴力とこどもへの影響―その実態と支援―」　中野区男女共同参画センター事業講習会　中野区男女共同参画センター研修室 2007.3.31

奥山眞紀子 「児童虐待の現状と地域ネットワーク」平成 19 年度県民福祉講座「緑陰大学」　鳥取県社会福祉協議会　2007.5.21

奥山眞紀子 「性的虐待の実態、背景、その発見、面接方法と司法的関与」金沢弁護士会犯罪被害者支援委員会研修会講師　金沢市観光会館　2007.6.15

奥山眞紀子 「DV 被害・児童虐待を受けた母子への支援姿勢を学ぶ～母子生活支援施設利用者の現状から～」第 29 回全国母子生活支援施設職員研修会　ウィリング横浜 2007.6.22

奥山眞紀子 「子どもの虐待の早期発見に向けて」第9回小児のこころと身体の健康フォーラム　帝京大学病院 734教室　2007.6.23

奥山眞紀子 「行動障害、うつ、自殺等思春期に起きやすい左記の問題に関する診断と対応」日本小児科学会主催：思春期医学臨床講習会　東京大学山上会館　2007.6.30

奥山眞紀子 「子どもの虐待基礎知識」「性的虐待・子どもへの聞き取りの原則」ＮＰＯ法人 女性の安全と健康のための支援教育センター2007年7月研修講座 明治乳業本社　2007.7.8

奥山眞紀子 「子どもを“被害”と“加害”の危険から守るために」日本小児科学会プレスセミナー　東京會舘　2007.7.17

奥山眞紀子 「虐待に対する院内ネットワークの実際―国立成育医療センターにおける活動」平成19年度認定看護士専門課程　国立成育医療センター　2007.8.24

奥山眞紀子 「虐待を受けた思春期児童の自己感の形成について」平成19年度全国児童自立支援施設中堅職員研修　国立武蔵野学院　2007.9.11

奥山眞紀子 「地域における世代間交流と高齢者ケア～日米の事例から～」公開セミナーのパネラー　聖路加看護大学内　2007.10.13

奥山眞紀子 「虐待臨床から見たこころとからだ」グラクソ・スミスクライン(株)　こころとからだの勉強会　ＢＩＺ新宿　2007.10.17

奥山眞紀子 「性的虐待の心身におよぼす影響」　平成19年度虐待対応研修 子どもの虹研修センター　2007.11.7

奥山眞紀子 「性的虐待を受けた子どもへの援助について～性的虐待がもたらす精神的問題について～」平成19年度児童相談所専門性強化研修事例検討研修セミナー　千葉県市川児童相談所　2007.11.9

奥山眞紀子 「虐待防止に対する組織としての取り組み」　東京北社会保険病院研修会　東京北社会保険病院講堂　2007.12.19

青木豊

Ａ、誌上発表

論文

Cheng,S.,　Kondo,N.,　○ Aoki,Y.,Kitamura,Y.,Takeda,Y.,&　Yamagata,Z.(2007)　The effectiveness of early intervention and the factors related to child behavioral problems at age 2: A randomized controlled trial. Science Direct.83,683-691.

青木豊：愛着障害，里親と子ども，2,61-69.2007

青木豊：愛着障害，日本医事新報,4326，70-72.2007

青木豊：表象志向的乳幼児―親精神療法・心理療法，こころの臨床a・la・carte、26 (3) 485-489.　星和書店、2007

青木豊：乳幼児の精神疾患、上島ら編、「精神医学の基礎知識」、260-280、誠信書房、2007

Ｂ、口演

１、学会発表

安部慎吾, 青木豊, 南山今日子, 芝太郎: 被虐待乳幼児に対する愛着に方向付けられた養育プログラムについて－乳児院及び児童養護施設における試み. 第 13 回日本子どもの虐待防止学会、p14. 2007

芝太郎、青木豊, 南山今日子, 安部慎吾：施設における被虐待乳幼児の特長についての研究. 第 13 回日本子どもの虐待防止学会、p14. 2007

青木豊、南山今日子、芝太郎、阿部伸吾、奥山眞紀子、松本英夫： 愛着行動チェックリストの信頼性・妥当性の準備的検討, 第 17 回乳幼児医学・心理学会、p11. 2007

２、一般講演

青木豊：「育児と愛着とその障害」　特別講演　第 9 回東北児童青年精神医学会　2007

安部計彦

Ｂ、口演

１、学会発表

安部計彦「児童相談所一時保護所の現状と課題（その 2)」日本子ども家庭福祉学会、2007 年 6 月 10 日、大阪大谷大学

安部計彦「児童虐待と学校ソーシャルワーク」日本学校ソーシャルワーク学会、2007 年 6 月 17 日、大阪教育会館

安部計彦「児童虐待相談減少の可能性」日本子ども虐待防止学会、2007 年 12 月 15 日、三重県総合文化センター

小野善郎

Ａ、誌上発表

１、論文

小野善郎：地域での子育てと児童相談所の役割. 教育と医学、55 (2): 117-124, 2007.

小野善郎：子どもの心理的虐待の概念・定義と精神医学的意義. 児童青年精神医学とその近接領域、48 (1): 1-20, 2007.

小野善郎：児童福祉における精神科医の役割. 臨床精神医学、36(5): 527-531, 2007.

小野善郎：養育の破綻－児童福祉に守られる子どもたち－. こころの科学、No. 134, 55-60, 2007

小野善郎：児童福祉領域における精神科医の役割. 子どもの虐待とネグレクト、9 (3): 345-350, 2007.

２、著書

Andres J. Pumariega & Nancy C. Winters （編）、 小野善郎（監訳）：児童青年の地域精神保健ハンドブック－米国におけるシステム・オブ・ケアの理論と実践－. 明石書店、東京、2007.

加藤曜子

Ａ、誌上発表

１、論文

加藤曜子：「児童虐待防止ネットワークから要保護児童対策地域協議会移行期における課題」流通科学大学論集、人間・社会・自然編、２００８年１月発行予定

加藤曜子：「児童虐待防止法改正にあたって一民間団体の立場から」少年育成、２００７年４月　第６１３号, 30-36.

加藤曜子：市町村ネットワーク（要保護児童対策地域協議会）多機関間会議―実務者会議を中心に考える　「流通科学大学論集」人間・社会・自然編　第１９巻第３号　２００７年３月 29-42.

２、著書

加藤曜子「民間団体と児童虐待防止」　津崎哲郎「児童虐待レポート一最前線からの報告」予定、ミネルヴァ書房、２００８年　５月発行予定　マニュアル　要保護児童対策地域協議会（市町村虐待防止ネットワーク）個別ケース検討会議のための　　在宅アセスメントシート指標シートマニュアル（改訂版）２００７年３月

Ｂ、口演

２、一般講演

第８回全国児童家庭支援センター研究協議会高知大会

講演「ネットワークと児童家庭支援センターのあり方」平成１９年９月１１日

地域子育て支援ネットワーク研修会　　徳島県　平成１９年３月

講演「育児不安家庭を機関連携でサポートする子育て支援ネットワークの構築」

児童虐待防止講演会　　ながの子どもを虐待から守る会主催　平成１９年９月８日

「今、地域は子どもを虐待から防ぐために何ができるか？」

平成１９年度児童虐待対応職員研修　秋田県　平成１９年６月４日　「要保護児童対策地域協議会の意義と運営について」

虐待防止月間記念講演会　大阪市　平成１９年１１月「児童虐待予防は地域を守る地域ネットワークから」

佐藤拓代

Ａ、誌上発表

佐藤拓代：虐待とその予防一周産期医療の視点から．周産期医学、発行予定

佐藤拓代：虐待予防と親支援―保健所からのレポート．児童虐待レポート一最前線からの報告、ミネルヴァ書房。発行予定

佐藤拓代：保健分野のアセスメントと虐待像．子どもの虐待とネグレクト，発行予定

Takuyo SATO, Noriko MENJU: Attempt to Prevent Child Abuse Through Parent (Mother) Classes at Health Service Centers in Japan, 8th World Congress of Perinatal Medicine, 261, 2007

藤江芳子、佐藤拓代：虐待予防を目指した2か月親子講習会の効果～１歳6か月児健診までのフォロー～．日本公衆衛生雑誌，54(10)：348，2007

佐藤拓代：予防のためのアセスメント．保健の科学、49(1)：55，　2007

Ｂ、口演

１、学会発表

Takuyo SATO, Noriko MENJU:8th World Congress of Perinatal Medicine、Attempt to Prevent Child Abuse Through Parent (Mother) Classes at Health Service Centers in Japan　2007

佐藤拓代、毛受矩子：第48回日本母性衛生学会発表、子ども虐待予防のための保健センター両（母）親教室運営ガイド　2007

佐藤拓代：第54回日本小児保健学会発表、虐待予防のための集団的支援～2ヶ月親子講習会の効果～　2007

桑田俊子、佐藤拓代：第46回日本公衆衛生学会近畿地方会発表、保健センターにおける子ども虐待へのシステム的支援　2007

藤江芳子、佐藤拓代：第66回日本公衆衛生学会発表、虐待予防を目指した2か月親子講習会の効果―1歳6か月児健診までのフォロー―2007

２、一般講演

佐藤拓代：19.4.24　大阪府主催：市町村保健師現任研修。保健師活動における虐待予防への取り組みとリスクアセスメント

佐藤拓代：19.6.29　福井県坂井・福井・奥越・丹南保健所主催：児童虐待防止専門研修。子ども虐待の予防・発見・防止～自らは支援を求めない親にこそ支援を～

佐藤拓代：19.7.25　京都府乙訓保健所主催：児童虐待未然防止体制強化研修。児童虐待防止における母子保健の役割

佐藤拓代：19.8.8　児童虐待防止協会主催：児童虐待防止協会オープン講座。乳幼児虐待の早期発見と母子保健

佐藤拓代：19.8.31　福岡市主催：家庭訪問事業に従事する職員研修。児童虐待のリスクアセスメント

佐藤拓代：19.9.5　子どもの虹情報研修センター主催：地域虐待対応等合同研修。アセスメントについて

佐藤拓代：19.9.28　大阪市主催：母子保健保健師研修。妊娠期からの子ども虐待予防

佐藤拓代：19.11.7　子どもの虹情報研修センター主催：治療機関・施設専門研修。ネグレクト

杉山登志郎

Ａ、誌上発表

１、１、論文

杉山登志郎、海野千畝子：性的虐待の治療に関する研究　その１：男性の性的虐待の臨床的特徴に関する研究．小児の精神と神経，47(4)，263-272，2007.

海野千畝子、杉山登志郎：性的虐待の治療に関する研究　その２：児童養護施設の施設内

性的虐待への対応．小児の精神と神経，47(4)，273-279，2007.
杉山登志郎：絡み合う子ども虐待と発達障害．里親と子ども、2，26-32．2007.
杉山登志郎：虐待を受けた子どもへの精神医学的治療．里親と子ども、2，92-98．2007.
杉山登志郎：非言語性学習障害再考　学習障害概念の再検討をめぐって．教育と医学、55(12),1124-1128,2007.
杉山登志郎：高機能広汎性発達障害と子ども虐待．日本小児科学会雑誌,111(7),839-846,2007.
杉山登志郎：解離．日本医事新報，4342，73-76,2007.
浅井朋子、杉山登志郎，小石誠二，東誠，並木典子：高機能広汎性発達障害の不適応行動に影響を及ぼす要因についての検討．小児の精神と神経、47(2)、77-87,2007.
海野千畝子、杉山登志郎：被虐待児への包括的ケア．母子保健情報,55,79-83,2007.
杉山登志郎：アスペルガー症候群の診断学的妥当性は、どこまで確立されているのか?精神医学,49(6),578-580,2007.
杉山登志郎：発達障害のパラダイム転換．そだちの科学、8、2-8,2007.
杉山登志郎：ライフサイクルと発達障害,臨床心理学,7(3),355-360,2007.
杉山登志郎、海野千畝子：子ども虐待による解離性障害への治療．精神療法,33(2),157-163,2007.
田村立、杉山登志郎：虐待を受けた子どもの予後．小児科臨床,60(4),751-759,2007.
Miyahara M, Bray A, Tsujii M, Sugiyama T: Reaction time of facial affect recognition in Asperger's disorder for cartoon and real, static and moving faces. Child Psychiatry and Human Development, 38, 121-134, 2007.
Toyoda T, Nakamura K, Yamada K, Thanseem I, Anitha A, Suda S, Tsujii M, Iwayama Y, Hattori E, Toyota T, Miyachi T, Iwata Y, Suzuki K, Matsuzaki H, Kawai M, Sekine Y, Tsuchiya K, Sugihara G, Ouchi Y, Sugiyama T, Takei N, Yoshikawa T, Mori N. : SNP analyses of growth factor genes EGF, TGFbeta-1, and HGF reveal haplotypic association of EGF with autism. 1. Biochem Biophys Res Commun, 360(4):715-720、2007.
Nishimura K, Nakamura K, Anitha A, Yamada K, Tsujii M, Iwayama Y, Hattori E, Toyota T, Takei N, Miyachi T, Iwata Y, Suzuki K, Matsuzaki H, Kawai M, Sekine Y, Tsuchiya K, Sugihara G, Suda S, Ouchi Y, Sugiyama T, Yoshikawa T, Mori N.: Genetic analyses of the brain-derived neurotrophic factor (BDNF) gene in autism. Biochem Biophys Res Commun, 27;356(1),200-206,2007.
Sugihara G, Hashimoto K, Iwata Y, Nakamura K, Tsujii M, Tsuchiya KJ, Sekine Y, Suzuki K, Suda S, Matsuzaki H, Kawai M, Minabe Y, Yagi A, Takei N, Sugiyama T, Mori N. : Decreased serum levels of hepatocyte growth factor in male adults with high-functioning autism. Prog Neuropsychopharmacol Biol Psychiatry, 31(2):412-415, 2007.

２、著書

杉山登志郎：子ども虐待という第四の発達障害．学研、東京、2007

杉山登志郎：発達障害の子どもたち．講談社新書、東京，2007.

Ｂ、口演

１、学会発表

杉山登志郎：高機能広汎性発達障害の周辺．　第４８回　日本児童青年精神医学会総会、教育講演，　盛岡，2007

杉山登志郎：子ども虐待と発達障害．　第４２回　日本発達障害学会　研究大会　教育講演，山口，2007.

杉山登志郎、浦野葉子：子ども虐待にどう向き合うか．　第５４回　日本小児保健学会シンポジウム　：子ども虐待予防のための保健・医療の連携強化．基調講演．　前橋、2007.

田中　究

Ａ、誌上発表

１、論文

宮口幸治、伊藤智子、藤瀬慶喜、保坂卓昭、鈴木由美子、田中究、白川治、前田潔：総合病院精神科での児童虐待への関与が疑われた患者例の検討　精神医学 49(12)、1231-1237.2007

田中康雄

Ａ、誌上発表

１、論文

田中康雄：軽度発達障害に対する教育と医療の連携　精神科臨床サービス　第７巻１号　P92-96　2007

田中康雄：発達障害と児童虐待　最新精神医学　第 12 巻 2 号　P111-117　2007

田中康雄：家族・家族会・自助グループ　日本臨牀　第 65 巻 3 号　P532-537　2007

田中康雄：子どもたちの「生きづらさ」を考える：児童精神医学の視点から　子ども発達臨床研究

創刊号　2007

田中康雄：「連携」するために知るべき，それぞれの実情　LD 研究　第 16 巻 1 号　P16-31　2007

田中康雄：問題行動・精神所見のみかた　小児科臨床別刷　第 60 巻 4 号　P709-715　2007

田中康雄：発達障害のある子どもたちと共に生きる　臨床心理学　第 7 巻 3 号　P313-318　2007

田中康雄：特別支援教育に向けての課題－医学が担う学際的役割－　Jpn. J. Child. Adolecs. Psychiatr

第48巻2号　P118-123　2007
田中康雄：教育現場における精神科医の役割　臨床精神医学　第 36 巻 5 号　P521-525　2007
田中康雄：注意欠陥多動性状態の問題と対応　最新精神医学　第 12 巻 4 号　P347-354　2007
２、著書
田中康雄：ADHD(注意欠陥多動性障害)　へるす出版　第30巻第9号　P1253-1261　2007
田中康雄：シンポジウム3「AD/HDの支援の仕方・支援の場」児童青年精神医学とその近接領域
第48巻2号　P95-100　2007
田中康雄：教育講演 11　教育と児童精神医学にある協働を考える　児童青年精神医学とその近接領域
第48巻4号　P463-468　2007
田中康雄：子どものメンタルヘルスがわかる本　明石書店　翻訳監修　2007
田中康雄：アスペルガー症候群　歴史と現場から究める　至文堂　座談会　2007
田中康雄：犯罪・非行の心理学　有斐閣　2007
田中康雄：非行一彷徨する若者，生の再構築に向けて　ゆまに書房　2007
田中康雄：虐待と現代の人間関係　-虐待に共通する視点とは-ゆまに書房　2007
Ｂ、口演
１、学会発表
川俣智路，金井優実子，田中康雄　2007　各ライフステージにおける発達障がい児・者支援を考える―養育者への自由記述形式による質問紙調査の分析と検討―　日本特殊教育学会第45回大会発表論文集　687　ポスター発表
俵谷知実，伊藤晋，大竹千代，佐藤昭宏，原野鮎子，米内山康嵩，田中康雄　2007　乳幼児期の発達障がい児支援を考える―養育者への自由記述形式による質問紙調査の分析と検討―　日本特殊教育学会第45回大会発表論文集　684　ポスター発表
米内山康嵩，俵谷知実，佐藤昭宏，伊藤晋，大竹千代，原野鮎子，田中康雄　2007　学齢期の発達障が児支援を考える―養育者への自由記述形式による質問紙調査の分析と検討―　日本特殊教育学会第45回大会発表論文集　685　ポスター発表
伊藤晋，大竹千代，佐藤昭宏，俵谷知実，原野鮎子，米内山康嵩，田中康雄　2007　成年期の発達障がい者支援を考える―養育者への自由記述形式による質問紙調査の分析と検討―　日本特殊教育学会第45回大会発表論文集　686　ポスター発表
佐藤昭宏，金井優実子，田中康雄　2007　学校生活における発達障がい児支援を考える―養育者への自由記述形式による質問紙調査の分析と検討―　日本特殊教育学会第45回大会発表論文集　688　ポスター発表
川俣智路，金井優実子，田中康雄　2007　発達障害児・者の養育困難はライフステージの変遷とともにどう変化するか―養育者への自由記述形式による調査から生涯発達支援を考える―　第48回日本児童青年精神医学会総会抄録集　155　口頭発表

冨田拓
Ａ、誌上発表

２、著書

冨田拓：少年院と児童自立支援施設の相違とそこから学ぶべきこと　刑政　7月号　第118巻通巻1381号　p.73-76　矯正協会　2007

冨田拓：児童自立支援施設　非行―彷徨する若者、生の再構築に向けて　上里一郎監修　影山任佐編　p.261-272　ゆまに書房　2007

冨田拓：発達障害などの精神障害がある非行児童の予後がよいのはなぜか　非行問題　p.104-116　全国児童自立支援施設協議会　2007

冨田拓：児童自立支援施設を知っていますか　クレリイエール　2月号　クレリイエール編集部2008（印刷中）

Ｂ、口演

２、一般講演

札幌市発達障害者支援体制整備事業社会適応部会「発達障害と社会不適応」講演会「矯正教育の現場から発達障害を考える」2007年11月26日

東北北海道児童自立支援施設研修会「非行臨床の今日的課題―自立支援と矯正教育の協働―」2007年11月15日

日本子ども虐待防止学会「入所ケアにおける被虐待児の育ちの支援体制―攻撃性の問題を中心に―2007年12月15日

中板育美

Ａ、誌上発表

１、論文

中板育美：「子どもの虐待とネグレクト」第9巻第3号　2007

Ｂ、口演

２、一般講演

第66回　日本公衆衛生学会　日時：平成19年10月24日（水）

場　所：愛媛県県立文化会館

発表者：国立保健医療科学院 公衆衛生看護部　中板育美

テーマ：「「育児支援家庭訪問事業」による児童虐待の発生予防・進行防止の可能性（第1報実施状況）」

日　時：平成19年10月24日（水）

場　所：愛媛県県立文化会館

発表者：滋賀医科大学医学部看護学科　　但馬　直子

テーマ：「「育児支援家庭訪問事業」による児童虐待の発生予防・進行防止の可能性（第2報保健と福祉の連携）」

日　時：平成 19 年 10 月 24 日（水）
場　所：愛媛県県立文化会館
発表者：東京都町田保健所　　藤原　千秋
テーマ：「「育児支援家庭訪問事業」による児童虐待の発生予防・進行防止の可能性(第３報有効事例分析結果のまとめ)」
日　時：平成 19 年 10 月 24 日（水）
場　所：愛媛県県立文化会館
発表者：埼玉県保健医療部　朝倉　真由美
テーマ：「埼玉県における親支援グループミーティングの取り組みについて」
Ｂ、口演
２、一般講演
社会福祉法人　栃木健康福祉協会　日時：平成 19 年 5 月２１日（月）
場所：栃木健康の森　テーマ：「養育支援が必要な人の早期発見と在宅支援」
社会福祉法人母子愛育会　総合母子保健センター　日時：平成 19 年 6 月１日（金）
場所：日本子ども家庭総合研究所 テーマ：「虐待する親および被虐待児の継続的支援」
横須賀市こども育成部　児童相談所・こども健康課合同研修会　日時：平成 19 年 6 月 15 日（金）場所：横須賀市ウエルシティ市民プラザ　テーマ：「乳幼児揺さぶられ症候群について」
平成 19 年度神奈川県保健福祉部　日時：平成 19 年 6 月 27 日（水）場所：大和市保健福祉センター　テーマ：「親支援グループの検証～再構築のために～」
全国児童相談所長会全体協議会　日時：平成 19 年 7 月 12 日（木）
場所：国立オリンピック記念青少年総合センター　テーマ：「児童相談所と市町村との連携」～虐待防止に向けた新たな体制づくりのために～」
茨城県母子保健推進検討会　日時：平成 19 年 7 月 25 日（水）場所：茨城県庁
テーマ：「母子保健の現状と課題～こんにちは赤ちゃん事業と育児支援家庭訪問事業」
長野県　日時：平成１９年　９月２９日（土）場所：長野県社会福祉総合センター
テーマ：保健機関が行う親支援グループ
福島県保健福祉部　日時：平成 19 年 10 月２２日（月）場所：福島県自治会館
テーマ：「子どもの虐待予防サポート推進研修　母子保健事業におけるハイリスク乳幼児を抱える親への支援」
神奈川県立保健福祉大学　実践教育センター　「児童虐待予防研修」日時：平成 19 年 10 月 30 日（火）場　所：テーマ：「妊娠期から児童虐待予防対策」
新潟県健康福祉部　乳幼児虐待予防研修会　日時：平成 19 年１１月１２日（月）・１２月２１日（金）　場　所：長岡市医師会館　テーマ：「要支援家庭を地域で支えていくための新たな体制づくり」
狭山市要保護児童対策協議会　日時：平成 19 年 11 月 13 日（火）　場　所：狭山市立中

央公民館　テーマ：「子ども虐待防止のために地域の支えでできること」
宮城県仙台保健福祉事務所　子ども虐待防止研修会　日時：平成１９年１１月２２日（木）
場　所：宮城県シルバーセンター　テーマ：「虐待予防と在宅支援～私たちにできること」

岡山県地域保健関係者研修　日時：平成１９年１１月２７日（火）　場所：岡山衛生会館
テーマ：「保健機関が行う親支援グループ　～保健機関に求められる役割」
岩手県母子保健関係者等子ども虐待防止研修　日時：平成１９年１１月 29 日（木）
場　所：岩手県福祉総合相談センター　テーマ：「地域ネットワークを生かした在宅支援～支援が成立するということ」
千葉県母子保健担当者子ども虐待防止研修　日時：平成１９年１１月１９日（月）・１１月２６日（月）　場所：千葉県庁　テーマ：「虐待の未然防止の推進　死亡事例から見える在宅支援の在り方」
宮城県石巻市子ども虐待対応研修　日時：平成１９年１２月５日（水）・１２月６日（木）
場　所：宮城県石巻合同庁舎　テーマ：「在宅養育支援の在り方・介入のポイント」
「死亡事例と援助者の心のケア」
福井県虐待防止研修　日時：平成１９年１２月１８日（火）場所：坂井健康福祉センター
テーマ：「育児支援家庭訪問事業を通した個別支援の在り方」
福井県虐待防止研修　日時：平成２０年1月２４日（木）場所：坂井健康福祉センター
テーマ：「保健機関が行う親支援グループについて」

宮本信也

Ａ、誌上発表

１、論文

宮本信也：Ⅲ　４．痛みの理解とそれへの対応、８．性分化異常と関係する心理的問題、10.治療コンプライアンスの問題とその対応　奥山眞紀子編：病気を抱えた子どもと家族の心のケア、東京、日本小児医事出版社、2007、111-118、133-139、146-154
宮本信也：第１章　第２節障害の概要；第３節知的障害；第４節広汎性発達障害；第５節注意欠陥／多動性障害；第６節発達の部分的障害、第３章　第９節末期患児、宮本信也・竹田一則編著：障害理解のための医学・生理学、東京、明石書店、2007、24-63、182-187
宮本信也：第４章　６．知的障害、中村満紀男・四日市章編著：障害科学とは何か、東京、明石書店、2007、150-153

山田不二子

Ａ、誌上発表

１、論文

山田不二子、田中真一郎、彦根倫子、工藤久美子、林節子、定永千寿子　乳幼児揺さぶら